

子どもの実態から出発し、子どもの成長 発達を願う養護教諭の豊かな実践に学ぶ

高松 葉子

一 はじめに

昨年三月十一日に発生した東日本大震災と福島原発事故から一年と八ヶ月がたとうとしている。

ここ北海道でも太平洋沿岸地区で被害に遭ったり、P T S Dに悩まされる子、そして東北から、自らも被爆の心配があったり肉親やふるさとを失って心に大きな傷を負いながら北海道に避難してきている子どもなどもある。また、給食をはじめとする食べ物や安全なのか。先日、室蘭沖で捕れた真鱈に、基準値内とはいえ高ベクレルの放射能が検出された。この未曾有の大きな災害については、これからまだまだ先の長い長期的な視野に立ったケアと対策が必要である。

貧困・格差の広がりはずますます深刻になるばかりで、就学援助受給対象の小中学生も一五六万人（二五・五八％）を優に超え十六年連続の増加で過去最多である。その中でも、北海道は

二三・四八％で全国四位（およそ四人に一人）にも上っている。

一方で子どもたちの被虐待件数も五万件をも突破し、増加傾向に歯止めがかからないことも親の経済状態との関連は自明であり、家庭生活の困窮と崩壊は子どもたちを苦しめ、子どもたちの教育と健康に、そして生存にさえも大きな影響を与えている。

改悪教育基本法の下で作られた改訂学習指導要領は、今年度から中学校でも本格実施された。「ゆとり」から「詰め込み」への変革と学力状況調査を元にした競争への煽りは、子どもたちの発達保障において、それを阻む影響があるのではないだろうか。

今年、大津の中2男子のいじめによる自殺事件から、「いじめ、自殺」が大きな社会的問題として取り上げられた。

私たち大人はそして教師は、この問題にどのように向き合ったらよいか試されている。二度とこのような悲しい事件を繰り返さないように、教育や学校のあり方が問い直され、大人はそれぞれの立場で何ができるのか突きつけられている。私たちはこの問いにどんな答えが出せるのか、みんなで知恵を出し合い語り合っていきたい。

私たち養護教諭の出発点は、子どもの体と心の実態をつかみ、目の前の子どもの訴えを聞き取り、丸ごと受け止めることにあ
る。子どもへの理解を深め、たとえ否定的な現象であっても、その奥底にある生活の苦悩や発達のもつれを明らかにし、人間

的要求に応答する保健室実践を進めてきた。

仲間の日々の実践から、更にその保健室と養護教諭の仕事のあり方を探り、その具体例を学び合いながら確信を深めていきたい。また、この生き辛い時代を健気に生きている子どもや家庭の現実、実態を交流し合い、それらを通じて貧困と格差、管理と競争が推し進められる社会情勢を鋭く見る目を磨きながら、運動の方向性とその道筋を探っていききたい。

そして、保健室からの発信力を高め合い、学校づくり、保護者との共同の取り組みを進めていきたい。(道教組養護教部提起)

二 実践報告と討議から

1 来室する子どもから、見えてくるものを大切に

宗谷管内 ○○小学校 K○

— 中規模小学校に異動して二年目のベテラン養護教諭K○さんによる報告。児童数三二九名の学校で、保健室利用数は二三七三件という多さである。毎日の保健室来室児童との関わりの中で、子どもたちのコミュニケーション力に疑問を持ち、登校してくる子どもたちのために毎朝保健室前に立ち「おはよう」と声かけをする。前任者から継続して十年間実施している年三

回の生活リズム調査をもとに子どもたちの様子を科学的データで捉え職員と保護者に発信する。また新たに、肥満度三〇%以上の子と、歯科検診後に指導が必要な子に、健康相談を実施する。担任と連携し頻回来室児童の観察を継続し、丁寧な保健だより作成や、管理職を意識した保健日誌の細やかな記載など、その手法はK○さんのキャリアゆえの実践である。だが、K○さんはしつくりいついていない。子どもの心に問いかけられるような話し方になっていないのでは？毎日の来室児童の対応に追われて、子どもの真の姿を捉えていないのでは？教員との連携が不十分では？と焦燥感を抱いている。子どもたちが自分のからだの主体者になって欲しいと願い、あくまでも目の前の子どもたちと向き合おうとするからこそその感覚であろう。討議の中で「できない、できない、と思っていたことが、うまくまわる瞬間がある。」という発言があった。果敢に実践を積み重ねているK○さんに敬意を表するとともに、K○さんならではの今後の展開があると推測する。

2 一人ひとりを大切に作る保健室づくりを目指して

根室管内 ○○中学校 ○○

地域で一番大きな中学校、生徒数二五八名、喫煙や暴力行為などの問題行動を繰り返す生徒たちに、保健室閉鎖した時期

もあつたほどであつた。「難しい生徒は一人で抱えない・悩まない・話しやすい職員室」を共通認識に粘り強く生徒に関わり向き合ってきたことで、学校が落ち着いた。すると、保健室利用にも変化が見えた。ふらつと立ち寄りや集団来室の子どもたちが減り、内科的症状を訴える生徒が増加したのである。〇〇さんは、目には見えにくい生徒の苦悩の実態が気になるようになっていく。そして、保健室個人カルテ、毎朝の健康調査、保護者向けの文書の工夫など、一人ひとりのサインを見逃さず記録し発信する工夫を展開していく。保健だより「すてきなあなたに」のコーナーでは、普段目立たない生徒やあまり保健室に來ない生徒に光をあてて紹介する。〇〇さんはこのコーナーの取材のためにメモ帳を手に生徒の中に入っていく。その活動は生徒観察や生徒との関わりをより増幅させる効果を生んでいる。保健室来室生徒が抱える問題に触れ、「自分をわかつて欲しい」という気持ちを子どもたちはみな持っている」と気付く。そして本音を出してもらえる保健室作りを心がけている。

教師集団は、学校の大きな荒れがおさまってほつとするのではなく、またいつ同様の荒れが来るのかわからないと考えているという学校である。今まで手がかけられなかった子どもたちにも手をかけてあげようとする〇〇さんの思いは、まわりの教師たちにも理解され連携もできている。理想に近い学校作りとの感想も出た。

3 一歩をいっしょにふみだそう！保健室からの願い

胆振管内 ○〇小学校 N〇

軽度発達障害の子が健康診断を受けることは、大きな不安とストレスになってしまふことに気付いき、どの子にも安心してきちんと受診してもらいたいという願いから始まった実践である。N〇さんは、前年度心電図検査を受けられなかった高機能自閉症のTくんに対して、まず検査の事前指導を早い時期から計画的に工夫していく。保健室に手作りの掲示物や実際の検査器具を模した物を展示する。また、保健だよりをTくんにわかり易くするため簡潔に見やすくした。検診当日は本人の緊張感を受け止め丁寧な声かけをし、無事検査は終了した。「できたね。お母さんにも、担任の先生にも出来たよって伝えられるね。」とN〇さんの声かけに嬉しそうな様子のTくん。検診業者の都合で未受検者の再検査は次年度検査になる状況を町の学校保健会で要望し改善した。よい形で健診を終えた後、運動会の練習で、Tくんが遊戯のボックスステップが出来ていないことに気付いた。保健室の床面に、Tくんが好きなマリオカートのイラストで練習用のシートを貼った。十回やったらコインをゲットできるシステムに他の子どもたちも飛びつき、保健室は大繁盛となった。本番では直前にハプニングがあり、Tくんのために

プログラム変更をしたという学校全体での支援体制のもと、Tくんはみんなと一緒にボックスステップを踏むことができた。Tくんのために準備した指導が他の子どもたちにも浸透し、大きな成果となった。取り組みを通してN〇さんは、子どもを支えているだけでなく、自分も子どもたちに支えられていることを実感したと語る。これは子どもと真正面からきっちり向き合っている教師だからこそその感想である。N〇さんならではの生き生きとした報告であった。

4 自分の歯を大切にできる子のために

後志管内 ○〇中学校 M〇

六年前に赴任した小学校で子どもたちのむし歯の多さに驚き歯科指導を始める。全校生徒四十名の小規模校でM〇さんは、子どもたちの口の中を見て、家庭の様子や本人の性格、生活習慣や衛生意識、経済状況、親の忙しさや関心度などが「その子の現在の歯の状況」を形成していると理解する。歯の学習、歯磨きカレンダーの活用、継続的な個別歯磨き指導を続ける。一人ひとりの口の中の様子を写真撮影し、保護者に報告する。経年的に変化を確認することで、子どもたちの達成感を促す。健康認識を深めていくために、一人ひとりに寄り添い丁寧な指導し自己肯定感をはぐくむ。校長に歯の写真撮影を頼んだり、教

員・家庭・学校歯科医に取り組みを伝えることで、まわりの理解と協力を得ている。そして、学校にも家庭にも浸透していった「歯は大切」の思い。六年間で劇的に変化する子どもたちのむし歯の様子は数値データからも立証されている。口の中がきれいになったことが自信になり、学校生活の様子も変化していく子どもたち。自分の課題に気付き、取り組み、目標を達成していくプロセスに質の高い教育活動がある。今春中学校に異動したM〇さんは、新たにゼロからのスタートを切った。やることは同じと言いつつM〇さんである。一人一人に寄り添いからだにこだわり続ける指導は、子どもたちの心はぐくんでいく。自分のからだを大切にできるようになった子どもは、自分の生き方そのものを大切にできるようになる。

5 「性に関する指導」の取り組み

渡島管内 ○〇中学校 H〇

全校生徒三二〇名の中学校、子どもたちの実態として高校生との交際や複雑な家庭環境、生徒指導上の問題があり、人間関係作りや性についての指導が必要だと感じたH〇さん。まず校内での使えるリソース探しをした。形骸化している性教育特別委員会、確立されている学年指導スタイルと保健授業、若い協力的な教員と生徒指導部長など。一年目はやってみたものの、

指導する教師側の戸惑いや温度差もあり、「楽しくない」指導で終わってしまった。翌年は、雑誌の講座形式の授業を真似て、教師側が本音で性について語る授業を実施した。性教育の渦を広げるため、このときは他学年の教師にも参観してもらった。

「性の話はおまけでもいい。まずは語ってください。」と言いつつ、既成の性教育にとらわれず、各教師の得意分野で「性」について生徒たちに語ってもらった。自分でやるのは苦手、先生方によってもらった方がいいと言うH〇さん。毎年、テーマ設定や形式はフレキシブルに、なおかつ先生方の実践は学校全体の共有財産としているあたりにH〇さんの力量を感じた。性教育に自信がついたから次の学校でもできると転出していく教員たち。養護教諭一人では限りがある性教育も、教員みんなでやれば広がることを実証した実践である。様々な立場の教員が子どもたちに自由に語ることができるということは、真に民主的な学校づくりがなされているとも言える。

6 縦割り班活動を利用した人間関係作り&食育活動

檜山管内 ○〇小学校 ○〇

以前、縦割り班活動を利用した給食指導を報告している〇〇さんは、それ以降の実践を報告した。「人間関係作り」を目的とした指導と食育活動を新たに盛り込んだものである。そのために給食指導以外に、食育指導として、給食試食会や給食便

りの工夫、栄養士による食の指導を行う。その他に、ミニ集会、運動会、草取り合戦、百人一首大会など多くの行事に取り組んだ。コミュニケーションがとれない子や指導上配慮を要する子、また逆にリーダーとなる子やリーダーになってほしい子の配置を考慮しながら班編制を行うことで、子どもたちがお互いに支え合い協力しあえる班活動を目指す。そして班活動を指導する傍ら、個別指導も丁寧に行っている。レポートの中には野菜が食べられず給食メニューで登校しぶりの子や人間関係づくりが難しく孤立しがちな子の事例報告があった。どちらの子へも、〇〇さんの明確な願いが綴られていた。また、〇〇さんは活動の場のような指導場面を非常に有効に利用して個別指導をしている。そのタイミングと方法は、それぞれの子どもに非常に適したものになっている。これは子ども一人一人の個性をよく理解し、更に継続的に観察していなければできない指導である。単なる行事や給食指導で終わればマンネリ化もあるが、子どもたちの学びをねらい工夫を重ねる〇〇さんの指導は、必ずその子たちを成長させていくであろう。自分に自信のある子どもに育てたい、中学校に行っても不登校にならずに学校生活を送ってもらいたい、と〇〇さんは語っている。そのために子どもたちが、人との関わり方を体験から学べるこの班活動は、今後にもさらに発展するであろう。

三 まとめ

今回は昨年開催しなかった体育との全体会を最初に行った。体育こそ人間関係作りができる授業だと言うレポーターの報告に、養護教諭の視点で討論参加できたことも収穫であった。

どの報告からも、子どもの未来を見つめ、成長発達課題を認識し奮闘する養護教諭の姿が見えてきた。子どもをよくみることで、子どもと丁寧に関わりその検証もしていくこと、情報発信すること、同僚・保護者・地域とつながること等々を基本に展開された実践は、必ず成果をもたらしている。これは私たちの取り組みの方向性を確信できることでもある。

優れた実践のなかには丁寧な個別指導と集団指導が車の両輪のように存在する。集団指導から入っても個別指導の場面は必要になるし、逆に個別指導をしていくなかで集団指導に発展することもある。養護教諭の行う教育活動は保健室だけでなく、様々な場面と場所で行われていることがよくわかる。保健室での個別指導だけではなく、学校行事や特別活動など様々な場面における指導は、周りの子どもたちを巻き込み相乗効果を生み出すことも多い。どの実践もそれを強みとしているように見える。そして、指導の場面と場所がバラエティに富んでいることで、指導を受け入れる子どもたちの反応が柔軟であることに気が

付く。そこには、教師側からの一方的な指導ではなく、子どもの反応を見ながら試行錯誤し、丁寧に指導を積み重ねる養護教諭の姿がある。それに加えて、どのレポートにも生き生きとした保健だよりや給食だよりが存在していた。たよりは養護教諭実践の大切なツールである。どの学校にでも配布できるたよりは、いたたよりではないという発言があった。その学校の子どもたちの様子を伝え、読む人の心を掴み、発行が待たれるたよりは、養護教諭の力量によるものである。

他教員との連携・組織づくりについては、H○さんの全学的な性教育実践の報告から、更に深めたかったが、時間が足りず残念であった。ただ、他のレポートの中にも、周りの教員を巻き込む仕掛けがたくさん含まれていて、保健室からの情報発信と連携という点においても学ぶ点が多かった。

N○さんの特別支援やO○さんの縦割り班活動の取り組みから見えてくる「子どもは子どもの中で育つ」という視点も再度確認しておきたいとの発言があった。この点についても、今後更に討議を深めていきたいところである。

今回は高校と特別支援学校からの報告がなかったことを残念に思う。これからも多面的に北海道の子どもの実態と学校現場の状況を共有していきたい。今後の報告に期待するところである。

四 終わりに

今年も六本のレポート報告とともに、二日間を通して多くの参加者のもと、盛況な分科会となったことに感謝する。十数年ぶりにお会いする大先輩の出席にも感激であった。「つながり」をみなさんにも実感していただけたなら幸いである。「貧困と格差」「不安と孤独」が一層強まっている社会情勢であるが、この「つながり」と教育の力がもたらすものの大きさを再度胸に刻み、現場での実践につなげていきたい。大がかりな実践でなくても、学校で子どもと向き合っている、その日常を綴って報告していただきたい。そこから、自分では気付かなかった学びが生まれるのが合研である。次年度も活発な討論ができることを願っている。

(旭川東高校)